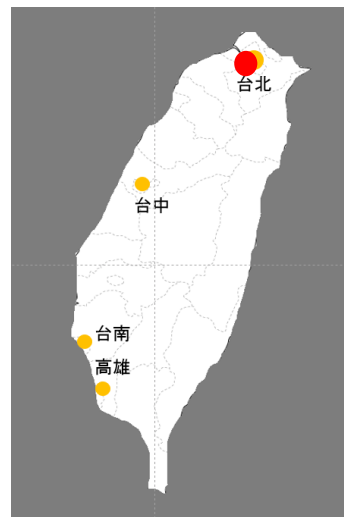


## 外省人の密集コミュニティ・台北寶藏巖地区 —国際芸術村に再生させる実験

くらし学際研究所・チーム〈近隣アジアを知る〉

垂水英司



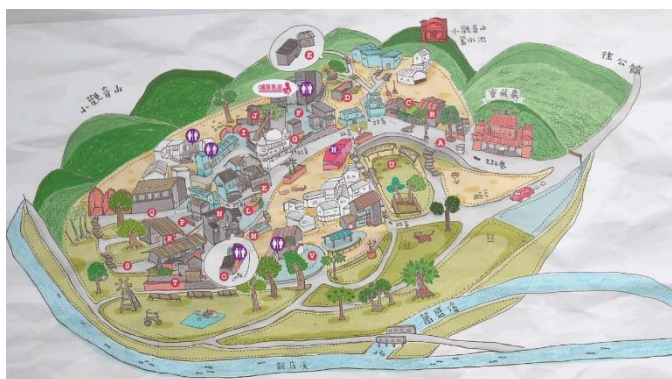
台北市にある国立台湾大学の少し南、新店溪という河川に沿って小高い丘がある。入口に寶藏巖觀音亭というお寺があって、その裏にはびっしりと小さな住宅が這い上がっている。寶藏巖地区と呼ばれる地区である。さしずめ日本の都市でよく見かけるスプロールした密集市街地だ。



寶藏巖地区

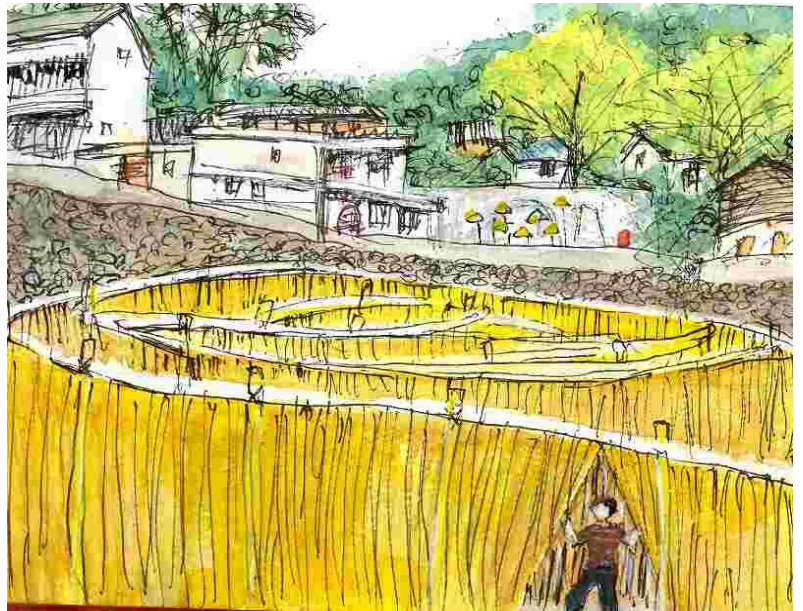
このあたりは元々、日本軍が高射砲部隊の弾薬庫、地下壕、兵舎などを建設し、日本の敗戦後それらの施設は国府軍に接收された。いわば軍関係の土地といった場所で、当時の住民といえは3~5軒ほどの農家だけだったという。しかし、1960年代になると退役軍人などの外省人が無許可の住宅を建て始め、自然発生的に密集した外省人のコミュニティが形成された。1980年代には4ヘクタール、人家は200戸余りにまでなったという。ここは外省人が住む一種の眷村であるが、日本の宿舎を転用した眷村などとは様相が異なった事例である。(5. 岡山楽群村を参照)

その後、台北市はこの違法建築の密集集落を取り壊して公園を整備する計画を決め、1994年には住民に家屋の撤去を迫った。これに対し、取り壊しに反発する住民の運動が展開され、その後台湾大学の教師、学生、社会活動家なども支援に入った。紆余曲折の交渉が続いた結果、最終的に台北市は国際芸術村と歴史集落を結合させたまちづくりを決断した。2004年台北市政



街角にある寶藏巖芸術村案内図

府はこの地区を「寶藏巖歴史建築」に指定し、集落の修繕などを進めたうえ、2010年に「寶藏巖國際藝術村」の正式運営を始めた。今、村内には14の「芸術家工房」があり、内外のアーティストがここに駐在して創作している。さらに、集落のあちこちには、屋外空間にアート作品が置かれている。



沢山の竹を吊り下げたインスタレーション。台湾では、竹を使ったアート作品も多い。

この芸術村のことを初めて聞いたのは、始まったばかりの寶藏巖國際藝術村にアーティストとして数か月滞在したという日本の若いアーティストからだった。一度訪ねたい

と思っていた私は、台北で時間のゆとりができた時、アポイントもなしに訪ねてみた。

(2014年)

寶藏巖の寺院の境内をぬけると、すぐに集落に入る。くねくねとした狭い坂道や急な階段に沿って、いかにも急ごしらえのような小さな家が、重なるように建ち並んでいる。先へ進んでいくと、ふとアーティストの工房に突き当たる。街角には彫刻や工芸品が置かれている。少し広い広場にでると、たくさんの竹を吊り下げた大きなインスタレーション(アート展示)に出会った。

1960~1980年という比較的最近形成された市街地、それも違反建築で形成された問題市街地を、「歴史街区」として位置付けたことの意味を考えさせられた。そして「アートとの結合」がどのような効果を生み出すのだろうか。いずれにせよ、大いなる実験であることは確かだ。住民、行政、専門家、あるいはアーティストの中で、どのような議論があったのだろうか。同じような密集市街地を抱えている我が国からも、寶藏巖國際藝術村の実験の経過を大いに注視したいものだ。